

文献

- (1) 中井久夫『治療文化論——精神医学的再構築の試み』(岩波書店 一九九〇年)
- (2) 村瀬嘉代子「臨床心理士の災害支援活動」『臨床心理学』一一・四(金剛出版 二〇一一年) 四六九・四七二頁
- (3) 片岡 龍「東北から、災害に向き合う新たな人間像を考える」第一〇四回(公共哲学京都フォーラム) 二〇一一年八月二二日 神戸ポートピアホテル
- (4) 塚崎直樹『音楽』八〇号(個人誌 二〇一一年六月一日)
- (5) 児島永作「ボランティアは良心の集合体に見た究極の組織とは」『公共的良識人』二三三・三五号(公共哲学共働研究所 二〇一一年)

本稿はブリュッセル自由大学(二〇一一年九月十九・二〇日 ベルギー)で開催されたE.Uとの協働「大規模自然災害支援」国際シンポジウムでの発表稿にもとづくものである。

第三章 「揺れるたましい」と「死の欲動」

——被災しなかった私の震災体験

中間 玲子

はじめに

一九九五年一月十七日、淡路島を震源とする巨大地震、阪神淡路大震災が起こった。二〇一〇年の十二月に開催された日本臨床心理身体運動学会では、「揺れるたましい」という大会テーマのもと、阪神淡路大震災の際に体験されたところの問題が取り上げられ、論議された。予稿集に、熊倉先生が以下のようなことを書かれていた。「心が揺れる。身体がゆれる。それは日常にあることです。しかし、その全体が揺れた。大地が揺れた。「中略」つまり、人が身体と心と分けられる以前の生命体、「生きること」の根源が揺れた。——大地の揺らぎが、私たちの「生」(Being)の揺らぎである。この言葉が実に印象的でずっと心に残っていた。それから三ヶ月後の二〇一一年三月十一日、東北地方で巨大地震を伴う大震災が発生した。予想もしなかったことだった。被害は東北および北関東地方の実に広大な

地域に及んだ。原子力発電所の事故も重なり、日本中が、改めて、生きることの根源を揺さぶられることとなった。地震が起こってから、上記の熊倉先生の言葉を何度ひしひしと感じただろう。今も、揺らぎはおさまっていない。私は、二〇〇九年の三月まで福島大学に勤務していた。FUKUSHIMAとして世界的に有名になってしまった福島県に私は住んでいた。そこには、私とつながった多くの人が今も住んでいる。一方私は、震災当時、そして現在も、安全な関西の土地に住み、日々を過ごしている。

そんな私でも、「生きること」の根源が揺れてしまったという実感があった。「揺れるたましい」とは、私そのものだった。現在(二〇一一年八月下旬)と震災発生直後(二〇一一年三月十一日以降)とでは、だいぶ生活状況も心の状況も変わった。だが三月当時の自分の「揺れるたましい」は、まだ手つかずのまま、残っている。熊倉先生は学会において、「賢い専門家は魂を語らない」とおっしゃった。だが、私がこの執筆にあたって書くべきこととして、私自身の「揺れるたましい」以上のことが見つからない。熊倉はこうも言っている。「魂の記録とは、個別的自己の頭脳が『なぜ生きるのか』と問い続けた記録では決してない。魂の記録とは、個別的自我が何ものかによって、圧倒的な力によって『なぜ生きるのか』と問われ続け、それに応えて、何をしたか。何を食べ、何所に寝て、誰を愛し、何を失い、何を憎み、何を信じて生きたのか、あるいは、死んだかという生活の記録だ」(二二七頁)と。

迷った挙げ句、私は、本章において、矛盾に満ちた生きた感情を書き残すことにした。自分の経験をフロイトの死の欲動に照らし合わせながらまとめてみようと思った。だが、本章は、読むに耐えるものではないかもしれない。それでも私は、私のなかで、この体験が風化することを恐れる。また、これから、私がこのテーマにどのように考えていくかについて、読者の方々から忌憚ない御意見が得られたら幸いである。そのような思いから、私は、論文としては未完といわざるをえないこの原稿を、やはり発表させていただくこととした。

なお、ここで示すのは震災が起こってから三月下旬までの半月ほどの間の物語である。それ以降もまた震災は続いている。私たちの生きる根源は揺らぎ続けている。その途上における私の振り返りである。

私が体験したことの概要

まず、私が震災後、短い期間に体験したことについて語りたい。

震災の当日、私は東北で何が起こったのかを夕方まで知らなかった。夕方、携帯をチェックすると「とりあえず生きてる、大丈夫」「なんとか無事です」という趣旨の短いメールが数件入っていた。何か大変なことが起こっていると感じた。家に帰ってテレビをつけると、想像を絶する大津波の映像。揺れ、混乱を続ける被災地の状況。すべてを呑み込むその様は、はじめは何事か理解できないほどであった。そこからは、テレビの前を動けなくなった。そして、自分はなぜ福島に留まらなかったのだろうか、なぜここ(関西)にいるのか、どうしようどうしよう、と、混乱したまま、テレビの前に座り続けた。新たな情報を聞いては涙を流し、映像を見ては涙を流し、東北の友だちを思っている。関西で、日常生活を送らねばならないこと、いつものように生きねばならないことが、何よりも苦しかった。だが同時に、冷静であらねばという思いも強くこみ上げていた。泣いてはいけない、私は安全な場所にいるのだから安全な場所で生きているのだから、私は強くあらねばならないと思った。私が心配して泣いて動けなくなるのは罪であると思った。私の理性が、今は自分がすべき日常の仕事をする時だと強く私に命じていたからである。来るべき時にいつでも仕事を中断できる余裕を作っておくべき時なのだ。その時に備えて、日常の仕事は今までと変わらず遂行することが私の義務であると信じた。

そんな折、スクールカウンセラーで担当していた生徒から高校合格のメールが入った。震災にはまったく触れない変わらぬ日常のなかで体験できた合格の喜びを伝えるものであった。彼女は変わらぬ日常を送っていた。変わらぬ日常を送り、しっかり自分の生活を生きていた。この現実直面したとき、無性に悲しくなった。彼女は私の理性が命じることを実践していただけなのに。

震災の動揺がまだ続くなか、福島第一原発の事故が起こった。私は原発についても放射線被害についても、ほとんど情報を持っていなかった。ただすごく恐ろしいことが起こっているらしい、福島が大変なことになった、といったことだけがニュースから伝わってきた。

それ以降の仲間からの声は、さまざまであった。「福島以外の人が福島が危険だと言っていることが腹が立つし悲しい」「家族や友人たちから福島から帰って来いと強く言われることがストレスで疲弊している」「ハイパーレスキュー隊の人たちががんばっているときに、悪いことばかり想定して心配するのは失礼だ」と、私に対する直接的・間接的な怒りや非難。「大丈夫だと信じて祈るしかない」「福島が好きだから最後の一人になるまで私は残る」「皆で励まし合っているから応援して」という決意表明。「皆が福島からいなくなる、私は行くところがない、どうしよう」「今日喪の農家の人が自殺したよ、福島もうダメかも」という不安。また、「今日やっとお風呂に入れたよ」「食料が何もない」というメールも届く、そんな時期である。それぞれの思いや感情の違いに揺さぶられ、私にとっての大地の揺らぎ、生きる根源の揺らぎは、急速に増大していった。

そんななか、大学の仲間が福島から離れ、避難したことを知る。このことは私にとって大きな衝撃となり、地割れのイメージをもたらす大きな事件となった。いいようのない激しい怒りがわき、号泣した。信じていたものに裏切られたような、悔しく許せない気持ちでいっぱいになった。なんとか感情を落ち着かせようとしたが、どうしても自分のなかで気持ちの整理がつかなかった。

混沌とした激しい感情が身体中に充満し、ぐるぐると循環し続けていた。次第にその感情の矛先、攻撃の対象は自分へと変わっていった。その仲間の行為は私自身の行為となつて、私のところを鋭く責め立てた。なぜ責めるのか。自分なんぞは二年前から避難してはいないか。自分も福島を捨てたではないか。問いが自分に向かった。「自分はどうしていたのか。」全く自信がもてないのである。どうすべきなのかさえ分からない。その場で自分が一体どんな行動をしてしまうのか。怖いと思った。このとき初めて、福島にいらなくてよかったと思った。おそらく私は、今以上に、自分の醜さに直面することとなつただろう。自分の知らない恐ろしい自分に出会うことが、ただただ怖かった。

その後、身近な人に対する不信、敵意、失望、怒りなど、通常ならば経験しないですんでいたであろう感情を複数の口からいろいろと聞くこととなつた。福島という同じ土地にいて同じ体験をした人たちであっても、気持ちや考えはばらばらなのである。人間関係・信頼関係は大きく揺らぎ、一時的ではあつたが、崩れていった。そして私も「福島にいない」という理由で、露骨な排除の言葉を投げられたりもした。そのときの人間関係・信頼関係の崩壊の経験、そしてそれらと同時につきつけられた自分と仲間の人格に対する不信は、私のなかに、生々しい出来事として手つかずのままに残ることとなつた。

ほんやりと、「地震さえなければ」と思った。原発は人災だと言われるが、だが今回の場合、その発端は地震だと素朴に思った。地震さえなければ。地震さえなければ、こんな人間関係の問題も起こらなかつただろう。仲間への失望も、自分への失望も、仲間からの疎外も、罪悪感も。地震さえなければ。その思いはほとんど確信に変わっていった。私はようやく、私なりの「被害者」の立場を得ることができた。私は当事者にはなれない。どれだけ頑張っても、福島との仲間と体験や思いを共有することはできない。だが、関西にいても福島からこころは離れない。現実的な問題として、皆のことが心配でたまらない。とはいえ、私自身の存在の仕方、つまり、動き方や態度、人格が、誰かを不快にさせたり傷つけたりしているかもしれない。自分で気づいた範囲だけでも、無責任で無神経な言動は結構あつただから。それでも、私は関わりたかつた。そしてたどり着いたのだ。「地震さえなければ」という思いに。

「震災」そしてそれをもたらした「自然」というものに対する怒りと腹立ち。その関係において得た「被害者」の立場は、私が福島の人たちと関わり続けること、どれだけ葛藤をもたらすとしてもやはり何かをしたいと思ってしまうことにつきまとう、自分自身の迷いや罪悪感に対する免罪符となつた。これが私が三月に体験したことであつた。

明確に記憶している当時の私の精神活動は、大きく二つある。その一つが、「さあ自分も死のう」という、奇妙な興奮であつた。思うに私は、死にとりつかれやすい人間である。隙あらば死ぬチャンスをつかっているようなところ

ろがある。だが、昔はさておき現在においては生々しい自殺念慮はない。それでも自分の精神生活の基底に、非生命への欲動、生命の自己否定があることは自覚している。この災害時において、その観念が生きて生きと私の思考の中心に躍り出たという感じがあった。私が自覚した死の欲動は、限りなく生と結びついているものであり、そのときの私には、それによって生きているという感覚があった。

記憶しているもう一つの精神活動は、自分が関西にいたことの不可解さであり孤独であった。私にとって東北は、多くの仲間がいる土地である。だが私はそこにいない。実はこれこそが、私にとってのトラウマであった。私は、死へ向かおうとする意識に身を委ねていた。そこで求めていた死とは、仲間と共に生きるための死、そして、生き延びているというトラウマから逃れるための死であったのだらう。

矛盾した表現になるが、この、死に対する強烈な思いにおいてこそ、私は自分が無事に生きていることを強烈に感じていた。

生きるための「死の欲動」

震災直後の混沌とした感情に、今あえて名前をあてはめてみるならば、絶望感、無力感、無常感といったところであらうか。それらが混沌とした状態で精神活動を支配し、通常の思考活動を停止させていたように思う。それでも、その刺激から逃れることができない。テレビの前に釘づけになり、延々と繰り返される映像を見ては、涙を流す。みずから繰り返してしまふのだ。それによって精神活動は麻痺するが、生命活動は維持される、そんな状態であった。

フロイトによると、私たちのところには、外界の刺激から内界を守る刺激障壁がある。通常であれば、それによって刺激が閾値を超えてこころの内部にまでは侵入することがない。こころの内部に入れるのは、障壁に備わった知覚や認識の仕組みを通して処理された、こころの内部で扱ひ得るかたちにされた刺激だけである。だが、障壁を破るほどの強い刺激が与えられた場合、障壁は破られ、扱ひきれない刺激に心は曝されることとなる。その際、私たちは通

常よりももつと原始的なメカニズムに頼らざるを得なくなる。それが、反復強迫だという。

反復強迫の背後にあるのは「死の欲動」であるとされる。フロイトは、死の欲動を、生の欲動よりも古いものとして想定し、それは生の欲動によって容易に懐柔されることはないと考えた。熊倉の要約に依拠すると、死の欲動における「死」とは、その欲動の目的についてのメタファーであるとされる。それは、退行が達し得る究極点、すなわち生命発生の限界点、非生命への移行点に由来する最も蒼古的な欲動であり、死の欲動は、そこから巨大な破壊エネルギーを得る。また、死の欲動の目的点が生きているという意味は、人間の意識のなかにある多彩な「死」のイメージや儀式とは関係なく、それは単に無機、非生命へと反復強迫する欲動だということ、つまり、精神生活の基底に、非生命への反復強迫、生命の自己否定があることを意味するということ。

ここで、トラウマについてのカルースの考え方^③を示したい。カルースは、トラウマおよび刺激障壁の概念について、時間的モデルの枠組みを重視し、トラウマを引き起こす衝撃は、精神の時間的経験に生じた亀裂であると述べる。刺激障壁の役割は、その境界において外からの刺激を時間的経験のなかに組み込み秩序化し、生物体を刺激から保護することにあるという。だが、刺激があまりに素早く襲ってきたために準備ができなかったという「恐怖」が亀裂をつくる。生命が肉体的危機にさらされたからではなく、こころがその危機を認識するのに一瞬、遅れをとってしまい、しっかりとつかみとることができなかったこと、これが心に亀裂を生じさせる原因であるという。

トラウマ経験者が悪夢を繰り返し見ることの根底にあるのは、この直接体験の欠陥であり、死の威嚇をリアルタイムで体験できずに逃してしまったことであるという。意識にとつて、生き延びるということはトラウマを経験することであり、自分の生命に対する威嚇をしっかりと把握できなかったがゆえに、それをつかみ取らねばならないという必然性に絶えず直面することであるとされる。トラウマ的体験を生き延びるということは、カルースによれば、その先に破壊が待っているとわかっているながらも、果てしない反復を内面に抱え込む宿命を背負うことなのである。

カルースは「人が生き延びることは、特別の形態の理解不可能性を提示することであり、フロイトは、トラウマという概念を作り上げることでその間の事情を理論化した」(八四―八五頁)と述べる。フロイトが外傷性神経症患者の

なかに見出したのは、恐ろしい事件への反応ではなく、生き延びたという経験の特異性と不可能性であったという。そして、フロイトが、心の準備ができていないことが引き起こすトラウマの効果が、驚愕であるとしたことに注目し、「そうだとすれば、悪夢によって体験されるトラウマとは、夢の中の体験のみを指しているのではなく、その夢からの目覚めの体験をも指していることになる」（九三頁）という。意識に驚愕をもたらすのは悪夢を見たことではなく、悪夢から目覚めることそのものであり、悪夢を見た後も生き延びているという事実のほうが、悪夢そのものより大きな驚きをもたらすのである。よって、「トラウマの本質は、死に直面したことにあるのではなく、われ知らずのうちにその危機を生き延びてしまったことにある」（九三頁）。

そしてこの「生き延びたことへの理解不可能性」こそ、「生命のない状態に帰還しようとする欲動」、つまり、「死の欲動」の概念の中心であるとカール・スは述べる。意識せずして死を生き延びてしまったという体験こそが死の欲動の源であり、生命とは、死からの目覚めである。そして「自分自身が生きはじめその瞬間に立ち戻りそこなつたがゆえに、死の欲動は人類の未来へ向けて出立していく」（九四頁）のだという。

私は、二年という時間差のゆえに災害に居合わせなかったということによって、最初から、生き延びた者としての理解不可能性を感じていたのだろう。だが、当時の私が多大なエネルギーを注いでいたのは、その驚愕を認めず、日常生活を送るということであった。それは、死の欲動に呑み込まれないようにする賢明な試みだったと考えられるし、一方で、自分自身が感情を抱くという権利を自ら放棄しようとする試みだったようにも思う。生き延びたという強い覚醒状態にある者が、理解不可能な世界に放り出されたという驚愕のなかで、それを抑圧してでもなんとか未来を作ろうとする努力であった。同時に、素朴な万能感に気づかぬまま賢明に生きようともがく愚かな人間の、身の程知らずな行為であったともいえる。

否定的感情への直面

自分自身が生き延びたということの苦しみに真に直面したのは、原発事故の混乱のなか、仲間の逃避と、その後、互いに対する不信が広がったという出来事に曝されたことによる。仲間の動向を知り、突然、激しい失望と悲しみと怒りがこみ上げてきた。強烈な否定的感情の噴出である。だがすぐさま、責めてはいけないという思いも強くこみ上げてきた。激しい葛藤であった。

私はどうありたかったのか。

すでに書いたように、当初から私は、自分が当事者でないこと、日常を生きねばならないことを強く意識していた。日常を生きねばならない苦しさのなかで、ただただ、皆の無事を願っていた。さらに、願うと同時に願いすぎてはいけないとも思っていた。福島の間にとつて、理想的な、非当事者であろうとした。私はいうなれば、外部の者であった。決して当事者になれない。その葛藤から逃れるべく、理想的な非当事者となる方途を模索し続けていた。当事者ではない自分が生きる意味をそこに求めたのだと思う。自分に対する万能感にも守られ、そうなれると信じていた。日常を生きるという努力にも、その欲求を実現する手段としての意味を読み取ることができる。

ところが仲間の行動を知ったとき、私はどうしても悪感情を抑えられなかった。それによって私はさらなる危機に陥った。責めてはいけない、相手の立場になって考えなければならぬ、理想的な非当事者であれ。私は必死で言い聞かせたが、それがどうしてもできなかった。理想的な非当事者となることで、福島にいない自分を正当化しようとしていたのだが、その試みは早くも失敗した。

こみ上げる悪感情のなかで、次第に、理想的な非当事者であれない自分へと怒りが向かっていく。「私に責める資格はないんだ。その人たちも苦しんで決断したんだ」、そう一生懸命自分をいさめるうちに、ある一つの考えに思い当たる。私は理想的な非当事者であろうとするなかで、福島で被災した自分というものをどこか理想的にイメージし

ていたということである。福島に自分がいたならばきつとこうしただろうと、福島にいない者がその幻想の人物の立場から現実の人の行動を非難していたのである。

その考えに行きついたとき、自分の傲慢さと万能感に愕然とする。そして、激しい自己への糾弾が始まった。「お前はどうかんだ、本当にその場に身を置いてみる。理想化したイメージでものを言うんじゃない。実際にそこにいたとき、そう動かなかつたと言えるか。なぜ言えるのか。本当にそう言い切れるか」。

私の答えは「わからない」であった。答えが出なかつた。いかなる答えにも確信が持てなかつた。なぜか。私はその場にいないからだ。このことは、自分が皆と一緒にいられないことを明確に自覚させ、私は深い孤独感に陥った。そしてこのことは、仲間の行為が私の行為である可能性が決して消えないことを意味した。いつしか、仲間の行為は、私の行為となった。その人は、私だ。この思いは、私の中に突如訪れた。自分のもつ暗い部分、言葉にするならば、確実に心の中に存在する、利己性、裏切り、冷酷さといったものだろうか。それに突然直面させられた。その存在を知らなかつたわけではない。だが、向き合わなかつたものだ。その闇との直面は、いい知れぬ恐ろしいものだった。怖かつた。私は全速力でそこから逃げた。

そのときから、自分が関西にいることの意味が変わつた。私は恐ろしいものに変化（へんげ）せずにすんだ。私は安全な場所にいる。その闇を表に出さずにすんだ。安堵があつた。そう思つたとき、自分に対する失望に、泣いた。私は福島で生きようとする人たちの存在を知つており、近くで共に力を合わせられない自分に苦しんでいた。だが、本当は自分も逃げてしまつたのかもしれない。そう思うと、この仲間への怒りには、自分の影と直面しなければならなくなつたことへの怒りの側面もあつたのだろうと思われる。

そして今、その気持ちを振り返ると、さらに次のようなことを思う。私が抱いた失望と怒りの正体は、裏切られたという気持ちだつたということである。なぜだろう。当時、多くの人が「殉死」あるいは「自己犠牲」の話に心を打たれ、涙し、いつしかそれが美談として語られていたように思う。自分がそのような行動をとれないもどかしさも重なる。私はその仲間にならぬまいを知らず知らず期待していたのである。その幻想を勝手に抱き、その幻

想が崩れたことでひどく裏切られ、傷つけられた気持ちになつていたのである。自分に対する糾弾も、おそらくそこから生じていた。冷静になつた今、このことに気づいて愕然とする。

だが当時はそのようなことにも気づくことができず、自分に対して激しい糾弾をおこなう間も、こみあげる悪感情は止まなかつた。そして私が意図せずおこなつたのは、過度の知性化による選別作業であつた。それまでの疫学データから、逃げるべき層の優先順位を付けた。その仲間はずれも優先順位の低いところにいた。そのことが一層、私の悪感情を喚起し、しかもその悪感情を正当化した。

人を大切に思つていたつもりが、その実、犠牲を求めていたことが恐ろしい。

「地震とつながる」ことの意味

仲間の避難をめくり、私は己の悪感情に、己の闇に、直面した。「関西にいる私」に対しても「福島にいたかもしれない私」に対しても、失望した。そのなかで、災害からはもちろん、災害に遭わなかつたことよってみずから的人格の崩壊からも生き延びたことを自覚するに至つた。それは、安堵と罪悪感と無力感とをもたらした。

だが、まだ震災は続いていた。日にちが経つにつれて、私たちの生きる世界は以前よりも揺れを増した。人間関係をめぐる生々しい感情が行き交うようになったからである。それは時には、私に対しても向けられた。この時期には、激しい罪悪感も怒りもなく、疎外感と無力感と疲弊に曝されていた。それでも私は、自分は苦しんではいけな立場にあると感じており、自分をいたわるための注意を使うことを禁止し続けていた。それは、当事者ではないからである。私なんぞが苦しんで、私よりずっと苦しい立場にある人たちに申し訳ないと感じたからである。

自分以上に苦しんでいる人がいると思うとき、自分に苦しむことを許すことは本当に難しい。どうしてそう感じてしまうのか。やはり私たちは、自分を大切にすることと他者を大切にすることを、二者択一的なこととしてとらえてしまふところがあるのだろう。特に、非常時における援助資源が有限であるとき、その資源の配分先は大きな問題

となる。救急医療におけるトリアージュなどはわかりやすい例であろう。トリアージュとは「選別」を意味する。大災害などで多数の負傷者が発生した際、負傷者の命のレベルを判断し、治療すべき負傷者を選別するのである。そこでは、呼吸、循環、意識レベルの三つの観点から治療の優先順位が判断される。心理的ストレスをめぐって素朴に共有されている基準としては、いかなるストレス事象に出遭ったかということがあげられるかもしれない。どのくらい大変な事態を経験したかを出来事の大きさからとらえ、それによって個人が受けたストレスの度合いを推測するのである。だが実は、ストレスに対する認知評価の部分でストレスの大きさが決まることが広く認識されて久しい。どのくらいに受けた衝撃の度合いは目で見て測定できるものではなく、時には苦しみが無意識に追いやられていくことさえある。それでも私たちは、こころに受けた衝撃の度合いを、遭遇した出来事から素朴に査定してしまうところがある。その査定基準は多くの場合、出来事の大小という一次元のものである。そのため、苦しみべきかいなかに序列が生じてしまうのである。災害ケアなどの際には、苦しんでいるということを伝えることが大事だとよく言われる。本當にその通りだと思う。

その言葉をもらえなかった私が獲得した「これはすべて地震のせいだ」というイメージ。自分のこころの闇への直面と失望、仲間への悪感情、疎外感の中で、「苦しむことの禁止」も限界に近くなっていったのか。自分自身の傷付きや苦しみ、無力さや醜さがじわじわと滲み出るように感じられていた時にそれはほんやりと湧いてきた。私は被災していない。だが、その文脈のなかで数々の混乱を経験し、生々しく傷ついたではないか。地震さえなければそれは経験されなかったかもしれない。その観点に立てば、日本中、世界中の皆が被災者だ。

被災の範囲を自分のイメージのなかで広げることで初めて、私は、自分自身が傷ついたと感じてもいいのだと思うことができた。私には、自分も苦しんでいい立場があると納得できる根拠が必要だったのだ。また、この発想を得ることによって、被災地と被災地以外を分ける発想や、敵対する人間関係など、直面するたびに悲しくなる事態にも、冷静に向き合うことができるようになった。どこにポジショニングするかで見えなくなる事象が、別の次元に立つこ

とによって双方を同時に眺めることができるようになったのだと思う。

さらに、この発想は、もう一つ、私が生きるうえで大きな効用をもたらした。

このイメージがわいて以降、私は、地震をもたらした自然というものに対して、こころのなかで喧嘩を売るようになった。地震後、「自然の恐ろしさを知った、人間は自然にはかなわない」と、多くの人が言った。だが、自然だからという理由で、人が太刀打ちできないからという理由で、何をしてもいいというのか。形あるものをすべて壊し、形ないものまで壊していく。そんなことが許されていいのか。「人間なんて自然のなかではちっぽけな存在だ」、これもよく耳にするフレーズだ。だが、それで済ませられる問題なのか。私は自分の悪感情をすべて、地震、つまりは自然にぶつけ、この悲劇の責任をとれとこころのなかで繰り返し続けた。「本当にお前は大きな存在なのか。そんなに大きな存在であるならば、私なんか命の限り精一杯怒りをぶつけても、大したことはないはずだ。ならば、私の怒りを引き受けてみせろ。それができるか」こころのなかで挑み続けた。私の怒り方は、どんどん稚拙になっていった。言葉にするのも憚られるが、とにかく幼い頃の怒り方そのもののやり方で、私は自然に対して腹をたてていた。

私の自然に対する稚拙な怒りは、次第に私を「無」に導いた。私のなかの一部が、「無」に回帰し、代わりに、自分のなかに「無」を取り入れたというイメージを得た。このような過程には、それがイメージのレベルのことであっても、恐らく大きな守りが必要になるだろう。私の場合は、それが、自分のなかで抱いた「自然」であった。確かに自然は、私の怒りを引き受けてくれたのだ。また、「無」だと思っていたものは、生命力に満ちていたようにも思う。無を取り入れた私のたましいは、どんどん元気になった。私は、自然を責め立てることで、知らぬ間に自然とつながっていたようだ。自然との向き合いは、死と再生をもたらしたようにも思う。

同時にこれは、喪の過程の始まりであったようにも思う。震災とそれに伴う一連の過程は、それまでの人間関係や自分の抱いていた理想を喪失する経験であった。自然とつながったことによって、ようやく、その喪失を味わうことができ始めたようにも思う。だが、まだ何を失ったのか、そしてその喪失をどう感じているのか、つかみきれないところがある。これからの人生の中で、少しずつとらえ、味わっていくことになるのだろう。

(注) このことは、私がただただ被害者としてのファンタジーに逃げ込んだだけなのかもしれないとも感じるようになった。実に都合のよい死と再生のストーリーである。私はそれほどまでに生きたいのかも知れない。このファンタジーから目覚めたとき、また別のトラウマが押し寄せるとはだろうか。あるいは、そこから抜け出すことができないほどに、私は堅くそのファンタジーに留まり続けるのだろうか。(二〇一二年九月追記)

おわりに——死の欲動と生の欲動

今書き終えて、今回、「死の欲動」としてとらえたものは、実は、「生の欲動」だったのだろうかという疑問が浮かんでいる。生き延びてしまったことで日常に顔をもたげた死への欲動は、皆と一緒でありたいという快樂への欲求だったのだろうか。生きるために死さえも利用しようとする、まだ自覚されていない、生に対して食欲な私が存在しているだけののだろうか。

フロイトは「存在しようとする欲動それ自体は、死に向かって生きようとする、つまり、時間経過のなかでの生命維持それ自体は、死の欲動によって可能になっている」とも述べている。私が震災直後、生きていくことの強烈な自覚と同時に死への興奮を感じたことは、このことを端的に表しているのかもしれない。つまり、強烈な生は、強烈な死への欲動によって根源的に支えられているということである。熊倉は、「死への反復強迫は、「死」という不可知な目的点を目指す一方で、欲動である以上は生命の一現象として提示されていることは、しばしば見落とされる」(二二三頁)と指摘する。「死の欲動」の概念は、「死の欲動を秘めて人は如何に生きるか」という謎を射程に収めることを可能にするという。この表現は、私が常に自分の生に対して抱いている矛盾、解けない謎を言い当てている。生きながら死ぬということは絶対不可能なことだ。それでも、この二つはとても近い。

地震によって大地が揺れ、生きることの根源が揺れた時、「生きる」ことが「死ぬ」ことと隣り合わせであるとい

うことを思い知らされる。意識の上でも、生きることと死ぬことが近づき、重なり合う。その境目を意識しないこと、それが隣り合わせにあることに気づかないことこそが、日常的に生きることだとするならば、この両者が双子の関係にあることを自覚するとき、私たちの生きることの根源が揺れていると考えてよいのかもしれない。そのとき、わたしたちのたましいも、きつと激しく揺れているのだ。

文献

- (1) 熊倉伸宏『面接法2——方法論的意識をめぐって』〔新興医学出版社 二〇一二年〕
- (2) 熊倉伸宏『死の欲動——臨床人間学ノート』〔新興医学出版社 二〇〇〇年〕
- (3) カルース『トラウマ・歴史・物語——持ち主なき出来事』下河辺美知子訳〔みすず書房 二〇〇五年〕
- (4) ラザルス&フォルクマン『ストレスの心理学——認知的評価と対処の研究』本明寛・春木豊・織田雅美監訳〔実務教育出版 一九九一年〕

参考文献

- フロイト『快感原則の彼岸』小此木啓吾訳『フロイト著作集6』〔人文書院 一九七〇年〕一五〇―一九四頁
 ガーランド編『トラウマを理解する——対象関係論に基づく臨床アプローチ』松木邦裕監訳〔岩崎学術出版社 二〇一一年〕
 ハーヴェイ『悲しみに言葉——喪失とトラウマの心理学』安藤清志監訳〔誠信書房 二〇一二年〕
 森 茂起『トラウマの発見』〔講談社選書メチエ 二〇〇五年〕

揺れるたましいの深層
こころとからだの臨床学

2012年12月10日 第1版第1刷発行

〈監修者〉 山中康裕

〈編者〉 中島登代子・森岡正芳・前林清和

〈発行者〉 矢部敬一

〈発行所〉 株式会社 創元社

本社 〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6

TEL.06-6231-9010(代) FAX.06-6233-3111

東京支店 〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル

TEL.03-3269-1051

<http://www.sogensha.co.jp/>

〈印刷所〉 亜細亜印刷株式会社

©2012, Printed in Japan ISBN978-4-422-11556-6 C3011

〈検印廃止〉

落丁・乱丁のときはお取り替えいたします。

〔COPY〕 (社) 出版者著作権管理機構 委託出版物

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつと事前に、(社) 出版者著作権管理機構(電話 03-3513-6969、FAX 03-3513-6979、e-mail: info@copy.or.jp) の許諾を得てください。

〈監修者・編者紹介〉

◆山中康裕 (やまなか やすひろ)

名古屋市立大学大学院医学研究科修士、医学博士。
京都ヘルメス研究所所長・京都大学名誉教授。カワンセラー(河川救護士)。
専門領域は、精神医学、精神療法、分析心理学、心理臨床学。

◆中島登代子 (なかじま ともこ)

日本体育大学大学院体育学研究科修士課程修了。
浜松大学大学院健康科学研究科臨床心理学専攻教授。
専門領域は、臨床心理学、夢分析、学校臨床心理学、臨床スポーツ心理学。

◆森岡正芳 (もりおか まさよし)

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了、博士(教育学)。
神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授。
専門領域は、臨床心理学、文化心理学、臨床ナラティブアプローチ。

◆前林清和 (まえばやし きよかず)

筑波大学大学院修士課程体育学研究科体育方法学専攻修了、博士(文学)。
神戸学院大学人文学部・学際教育機構「防災・社会貢献ユニット」教授。
専門領域は、社会貢献学、心身論、武道論、臨床心理学。